

クリキンディ

東日本大震災支援特別号 ～私たちにできること～

● 発行：香川県青年海外協力協会 ● 発行日：平成24年3月11日（日） ● No.007

冬のさめき修学旅行 13-1 ネパール 果樹 高橋和寛



被災地である岩手県釜石市立大平中学校、宮城県岩沼市立玉浦中学校、岩沼市立岩沼西中学校の生徒を招き、1月6日～9日の日程で修学旅行として香川観光を楽しんでもらい、最後は香川県の協力隊OBを交えてリレーマラソン（駅伝）を走るというものでした。

尚この企画はJICA四国との共催で、香川県青年海外協力隊を育てる会、香川経済同友会、JR四国、高松駅弁様に後援頂きました。後援頂いた4団体にこの場を借りて御礼申し上げます。

① 中野うどん学校でのうどん打ち体験

県内外で人気の中野うどん学校でのうどん打ち体験です。粉からのうどん作りの工程を体験し、自分たちで打ったうどんを食べるといものですが、茹でたてのうどんをおいしそうに食べる子供達の笑顔に癒されつつも、香川県民として非常に嬉しく思いました。お土産に大量のうどんを購入していました。だし醤油が人気だったようです。



② みかん狩り体験

みかん栽培をしている中西OBの協力で高松市鬼無町是竹のみかん園でみかん狩り+糖度コンテストが行われました。

香川県屈指のブランドみかん産地である高松市鬼無町是竹でも特に日当たりのよい園地でみかんを取らせてもらいました。そして「これがおいしいハズ」と各々が思ったみかんを持ち寄り、高い糖度の果実を持ってきた上位3名に賞品進呈、という企画もありました。尚、

この糖度コンテストは、鬼無町出身の久保教授（岡山大学農学部 ケニアでJICA専門家の経験あり）のお心遣いにより実現しました。

本来なら11月くらいに収穫する早生温州みかんを1月まで樹上に置いておき、完熟して糖度が市販のものよりもはるかに高いみかんを子供達は収穫したそばから頬張り、「こんなおいしいみかんは食べたことが無い」と喜んでいました。皆お土産として買い物袋いっぱいのみかんを持って帰っていました。

③ まんのう公園リレーマラソン大会出場

中学生、引率の先生、国内協力隊、OB等総勢30名が10人ずつ3チームに分かれフルマラソンの距離（1周2キロのコースを21周と少し）を駅伝形式で走りました。他チーム含め総勢2500人ほどが参加した大規模な大会でしたが、なんと主催者のはからいで岩手県釜石市立大平中学校の生徒2名が開会式の選手宣誓に選ばれました。二人とも堂々と宣誓し、参加者からは大きな拍手が起こっていました。



我々は当初「怪我なく走ればいいや」くらいに考えたいたのですが、子供達の真剣な姿に手を抜くわけにもいかず、大人たちも息も絶え絶えになりながら一人4キロ（2キロを2回）激走しました。ちなみに恥ずかしながら私の2回目のタイムは大平中学校の3年生女子のトップの人に負けました・・・

④ 大平ソーラン

この旅行中最も印象的だったのが、今回 15 名の参加者があった岩手県釜石市立大平中学校の生徒たちによる「大平ソーラン」です。



もともと大平中学校には 10 年ほど前から続いているオリジナルの振り付けの「大平ソーラン」というものがあり、毎年 3 年生の中から選挙で選ばれた生徒たち「ソーラン委員会」が他の生徒の指導にあたり、体育祭などで全校で踊っているものらしいのですが、今回はその「ソーラン委員会」のメンバーが大平中学校の代表としてこの旅行に参加してくれました。震災前から体育祭のために土日返上で練習してきたようです。

震災後、子供達なりに自分たちにできることを話合っ、各地の避難所などで披露して被災地の人々に勇気や生きる力を与えてきた「大平ソーラン」。今回中野うどん学校、鬼無町の喫茶店、そして最後は宿泊先の琴平の旅館の宴会場で計 3 回披露してくれました。彼らもお客さん気分ではなく「ソーランを披露しにきた」という気合が入っていました。観客では我々以外にもうどん学校、喫茶店のスタッフや近所の人、旅館の他の宿泊客等がいました。



特に旅館の宴会場は 8 日の夜の晩御飯の後で、現在 3 年生の彼女らの舞う最後の「大平ソーラン」でした。受験のため引退して今の 2 年生に引き継ぐようです。

皆 4~6 キロのマラソンの後で、足が痛い生徒もいたでしょうが、踊る前に引率の先生がかけた「みんな筋肉痛で足が痛いとは思いますが最後の舞台だ、痛くても我慢しろ！」の言葉のあたりで、私も含め隊員 OB はほとんど泣いていたと思います。

ありきたりな言葉ですが、非常にかっこよく、10 ヶ月前彼らを襲った地震、津波を跳ね返すほどのエネルギーに満ちた踊りでした。



今回は「被災地の子供達に元気になってもらう」というのがコンセプトであったと思うのですが、終わってみればこちらが逆に元気をもらいました。

彼ら彼女らなら、この先どんな困難にも打ち勝って行けると非常に頼もしい気持ちになりました。

今回は香川県に住んでいる普通のお兄さん（おっちゃん？）という立場で彼らと接していましたが、今回の震災で、私が勤務する会社も大きな被害を受けました。福島県にある工場が被災し今も立ち入れない状況であるため、多くの同僚が職を失いました。被災地と何の関わりも無い人

はほとんどいないのではないのでしょうか。

「絆」という言葉が最近よく聞こえてきますが、途上国でボランティア経験のある協力隊 OB にはその経験から「絆」の意味をより強く自覚している人が多いはずで、今後も被災地との絆を深めていきたいと思ひます。

最後に今回引率で来ていた大平中学校の副校長先生から伺った釜石市の復興テーマで報告を結びます。

「負けえねぞ、釜石！」

協力隊でタイの西部に位置するカンチャナブリ県の大学に赴任し、大学生に日本語を教えはじめて、1年半が過ぎようとしていたころだった。朝授業に行くと、いつもは15人ほどの学生が半分しかいない。来ている学生に理由を聞くと、「津波が来るから、実家に帰った」と言うのだ。うん？ここには海がないのに、なぜ「津波」？よくよく聞いてみると、前の日の晩に、大きな川の上流にあるダムが決壊して津波が起こるといふ噂が回ってきたそうだ。それを信じた半分の学生が、実家に帰るなど避難をしたらしい。このころ、タイの南部やインドネシアを襲ったあのスマトラ島沖地震があったばかり。忘れもしない2004年12月26日。四六時中テレビから流れてくる津波の映像。強烈なインパクトを与えながら、「TSUNAMI」という言葉とその恐ろしさだけが、それまで津波を知らなかった人々の間に猛スピードで浸透していった。正しい知識は置き去りだった。

川で津波は起こらないということは日本人なら周知の事実。噂はもちろんデマだった。それに振り回されてしまった学生達を半ばあきれのような気持ちで見ている私だが、ある事実が気が付き愕然とする。それは、外国人である自分のところにその情報が全く入って来なかったという事実だ。情報を得るといふ点において、外国人である私は圧倒的に弱かった。急に不安になった。



あれから6年が経ち、私は現在香川県国際交流協会で、県内に住む外国人に対して日本語を教えたり、通訳を派遣したりする仕事をしている。そして、2011年3月11日東日本大震災発生。何にも手が付かず、何かしなきゃと気ばかりが焦っていたころ、職場に届いた通知に目が留まった。滋賀県の施設内に立ち上がった「東北地方太平洋沖地震多言語支援センター（以下、センター）」の運営スタッフとして、職員の派遣を要請するものだった。今の業務への影響や自分の経験で対応できる内容かどうかなど、上司や同僚とも相談し、参加を決めた。

センターの業務に関わったのは3月25日～31日までの1週間。ここでは、外国人被災者が必要としている情報をピックアップしたものや、被災地の国際交流協会から依頼があったものを原稿化し、それを外注先の各翻訳者に送り、翻訳された11言語（ポルトガル、タイ語、中国語、英語、スペイン語、タガログ語、インドネシア語、ベトナム語、韓国・朝鮮語、やさしい日本語、日本語）の情報を、ホームページ（<http://eqinfojp.net/>）に日々更新していた。情報を載せる前には、かならず情報元に多言語での対応が可能かどうか確認し、重要性や緊急性など今出すべき情報かどうかを審議していた。外国人被災者の不安を少しでも解消できればとの思いだった。



そのうち、外国人でも参加できるボランティア活動はないかという問合せが徐々に増えていった。私がスマトラ島沖地震のとき「タイのために何かしたい」と思ったのと同じように、日本のためにと考えてくれている外国人が多くいることに胸が熱くなった。安否確認、帰国・再入国の手続きなど、情報の内容は多岐に渡っているが、一番問合せが多かったのは、原発や放射能に関することだった。ただ、はっきりした情報がないまま掲載することは混乱を招きかねないという判断から載せなかった。情報は命に関わる。同時に、正しい情報は命を救う可能性も秘めている。情報を扱う者の一人として、身が引き締まる思いだった。

各被災地での対応に移行したとの判断で、遠隔地のセンターは2011年4月末日に活動を終了した。本当に必要としている外国人に必要な情報が届いているかどうかはいつもスタッフの課題だった。だが、「外国人の思いや状況を想像できるのはここしかない」というリーダーの言葉に目が覚めた。今もその思いを胸に、想像力をフルに働かせながら、日々の仕事に就く。



遠野ボランティア 20-4 モンゴル PCインストラクター 高橋梓

2011年3月11日。任国モンゴルで、間近となった帰国を楽しみに指折り数えている時期でした。「あなたの故郷が大変なことになっている。家族は無事か。本当に日本に帰るのか。」と現地の同僚や友人から電話やメールがひっきりなしに届きました。それから2週間、帰国準備でバタバタしながらも「日本はどうなっているのだろう。こんなときになぜこんなに遠いところにいるんだろう。」と、とにかく不安でした。時折現地で流れるTVの映像やインターネットから情報は入るものの、とても日本が遠く感じられたものです。帰国後、コンビニの空の棚が目立つ東京で研修を受け、香川に戻ってようやくじっくりと現状に追いついたという感じがあります。

6月、岩手県遠野市で後方支援拠点として個人ボランティアを受け入れていた「遠野まごころネット」にて活動をして来ました。津波が直撃した現場から避難所、内勤に支援物資倉庫の整理まで毎日さまざまな活動依頼が寄せられ、ボランティアは自分で活動を選びます。疲れたなと思ったら、無理せず休む、あるいは観光をしてリフレッシュする、なども自由です。(遠野は「河童」で有名な、景色の美しいステキな観光地!花巻温泉も近くです♪)

移動を含めた一週間のボランティアということで、活動は実質5日間となりました。少し内容を紹介します。

■1日目(6月19日): 陸前高田市 米崎地区

海岸そばの住宅地にて、おおまかな瓦礫撤去の終わった後の整備作業。お茶碗やはがきなど、生活感を感じるものがたくさん残っていました。少し先には、1階は津波のダメージを受けているものの、家屋は残っており生活をしている方が見えました。同じエリア内での被害のボーダー。心境としてはかなり複雑だろうと感じました。



■2日目(6月20日): 大槌町 かみよ稲穂館

「分ち合い隊」として避難所の方々が当番で行っている炊事をお手伝い。7人で75食分の夕食を作りました。帰りは「ありがとう」と総出で見送っていただき、恐縮してしまいました。昼間仕事のあるお母さんたちは帰宅後に75食分を調理しているのです。そんなお母さん達こそ神様のようなだと思いました。

■3日目(6月21日): 大槌町 桜木地区

地元の方がコミュニティで立ち上げたボランティアセンターの清掃。裏の蔵と屋内の階段下倉庫が乾燥した土に覆われていました。海岸を背にバスでくねくねと上った高台でしたが、私の肩ほどの高さに、水面が上がった跡が残っていました。この日、高いところで作業していた地元のボランティアの方が怪我をされ、救急車で運ばれました。被災者でありながら地域のために汗を流されていた最中のけが。命にかかわる怪我ではありませんでしたが「やってしもうた…」と悔しそうにつぶやく姿に平穩の欠如を感じ、やりきれない気持ちになりました。

■4日目(6月22日):釜石市の避難所4か所 / ■5日目(6月23日):大槌町 大槌高校

避難所で「タッピングタッチ」というリラクゼーションを行う「ふれあい隊」に参加。肩や背中、手足に軽くふれ、手と体双方のぬくもりで温めたり、背中を指先の腹で軽く弾ませるように優しく叩くことで、こころと体の緊張をほぐし、心身が健やかになろうとする力を引き出す効果があるそうです。施術をおすすめすると「そういう気分ではなくて。」という方もいらっしゃいましたが、毎日炊事などの当番でお疲れのお母さんグループなどは「あったかい」「楽になったよ」と言って喜んでくださいました。震災当日のこと、好きな韓流スターのこと、TVの話、いろんな話をしてくださいました。



カメラを持って出発したものの、結局被災状況の写真は1枚も撮りませんでした。目の前の瓦礫は、あの日被災するまでは地元の方々が使っていた大切なもの。津波に流されて何もない場所も、生活の場だったのです。軽い気持ちではシャッターを押せません。現状をきちんと知るためには、やはり実際に見てほしいと感じました。

被災地はもちろん直接被害を受けなかった人にも、震災によって経済活動への影響、節電の必要、気持ちが落ち込む、心が痛む…いろいろな問題が起きました。「みんなが被災者だ」と遠野まごころネットの総隊長さんがおっしゃっていましたが、その通りだと思います。だからこそ、みんなで頑張らなければいけないのだと思います。

震災から3ヶ月経っているのに、被災当時のままの瓦礫、落ち着かない避難所生活を送る人々…まだまだ、本当にまだまだ「復興よりも」「復旧」を急ぐ時期でした。梅雨入り直前で既に蒸し暑く、猛暑と厳しい冬はすぐそこ。少しずつでも、たくさん的人数で出来ることをするのが近道なのだと実感しました。復旧・復興には1人の100歩よりも、100人の1歩の方が断然、大きいのです。いつ同じことがどこで起こるかわらない国に住む人間同士として、微力ながらもその1歩分になれば、と思います。「動けるのに動かないのは嫌」という気持ちに対する自己満足かもしれませんが、行けてよかったと思っています。出来ることなら現地に行きたいけれど、厳しいと思っている方、ボランティア休暇、有給休暇、何でも使えるならぜひ使って行ってほしいと感じました。頑張らなければいけないのは被災地の方々だけではないことを、実感できると思います。

とはいえ距離もあるので現地に足を運ぶのはそう簡単ではないのが現実。(私もたまたま自由な時間があったから動けただけのこと。)ありきたりだけれどいちばん簡単で大事なことは「関心をもっていること」だと思います。節電でも、自分の防災対策でもいい。今回の出来事を忘れず、大きすぎる犠牲を、決して無駄にしないこと。あの日から1年が経し、いろいろなことを少し冷静に考えられる／考えなければいけない今、私自身も「他人事じゃないんだ」という気持ちを改めて持っていたいなと思います。もっと頑張れる、日本!



石巻・気仙沼大島ボランティア 15-1 ヨルダン 音楽 渡辺香里

あの日から1年。

もう1年、まだ1年?感じ方は人によって違うだろうけど、この1年で私には何ができただろう。

震災発生後、何かしたいという気持ちと、何をしたらいいのか、自分に何ができるのか分からないという気持ちで、テレビを見て泣くだけの日々が何日も続き、悔しさともどかしさでいっぱいだった。

初めて被災地を訪れたのは、4月15日、宮城県石巻市。

専修大学を拠点にボランティアセンターが整備されており、ボランティアが入りやすい状況となっていたこの街ですら、車がやっと通れるだけの道路の脇には道が続く限りのガレキの山。まだまだ冷え込みの厳しい寒さの中に立ち込める潮の臭い。あの日、この場所で起きたことを想像することも恐ろしい。

香川県内の有志14名で作った応援団は、4トントラック2台に支援物資と3000食の炊き出し用のうどんを積み、必要な水や発電機、ガソリンなどは全て持ち込んだ。3日間に渡り、市内各地での物資の配布と炊き出しを行ったが、1000食のうどんが3時間で売り切れ、配布物資に2回並ぶ人を見て誰が拒むことができるだろう。



あんなにテレビを見て泣いていたのに、被災地に行くと今自分がやるべきことに精一杯で、ひどい状況を見ても泣いている暇などない。初めて避難所になっている小学校を訪れたとき、何枚もの安否確認の紙が貼られた体育館のドアを開けると、たくさんの家族が小さなスペースを作り、目隠しにもならない高さにダンボール箱を積み上げている。中央には、コンビニのおにぎりとパン。テレビ



がよく映されたこの光景を目の当たりにした時、とても中に入ることが出来なかった。子どもは夜泣きもするだろう。お年寄りには底冷えが体に厳しいだろう。年頃の女の子の着替えは？愛する男女の営みは？私には帰る場所がある。この1週間頑張れば、香川に帰って好きな食事を取り、暖かい布団でゆっくりと眠ることができる。この状況の中「頑張ってください」という言葉をかけることはとても出来なかった。



7月16日から1週間、気仙沼大島にボランティアに入った。大島は気仙沼湾から7.5kmの距離にあることから、支援の手がなかなか入らず、復興作業が進んでいないという状況を知った協力隊OBが、長期的に滞在支援を行っているところ、私も手伝いに参加させてもらった。

前述の理由もあり、大島では地元住民が一丸となり復興作業に取り組んでいる。震災から半年ほどたったこの時期に、やっとその仕組みが確立されはじめ、ボランティアを受け入れる体制が整ったという話を聞いた。震災まで、島の収入は養殖と観光でまかなわれており、それに携わっていたほとんどの人は、津波で職を失っていた。そんな中で失業した若者たちが集まり、「島の復興は自らの手で」と結成されたチームは、辛いことがあってもバカなことを言って笑えるようにと‘おばか隊’と名づけられていた。



彼らは自らの家の片付けも後回しに、住民から作業依頼を受け、ボランティアを割り振り、自らもガレキ撤去作業を行う。震災後、休むことも忘れて動いていた。

7日間、ガレキ撤去作業を手伝ったが、毎日どんなに頑張っても私一人が運べるガレキの量なんて、ほんのわずか。そんな中、家主が一日2回、お茶やお菓子の差し入れを持ってきてくれる。申し訳ないと思い、遠慮しても毎回必ず持ってきてくれる。少しずつ休憩時間をとるようになり、一緒に話をするようになる。そこでやっと聞いたあの日あの時の事実。「私にとっては、テレビで見るのも写真で見るのも津波ではない。私が見たあの光景こそが津波だ」とおっしゃっていました。



被災地に行くことが素晴らしいことだとは思わない。自分の気持ちを落ち着かせるための自己満足なのではないか、と悩むこともある。でも、ただモヤモヤ悩んでいるのなら、行こうと。

実際に行って自身の肌で感じたことには、とても学ぶことがたくさんあった。何をやるから素晴らしいとか、やらないからダメとか、そういうのではなく、相手を思いやる気持ち。遠く離れていても同じ日本人。思いやりを持つことで、色んな行動ができると思う。

ガレキはなくなったのではなく目に付かないところに集められただけなのでは？人々も仮住まいに移っただけなのでは？みんなが夢や希望を持って前に進めるように、香川からもできる応援、私にもできること。これからも考え続けていきます。



復興支援活動報告&ガレキワークショップ

12月17日、香川県OB会の復興支援活動企画の第1弾として、約8ヶ月間被災地での復興支援活動を続けた協力隊OB（細川光宜氏/8-2/パプアニューギニア/木工）を招いて、体験談報告とガレキアートのワークショップを開催しました。

細川さんは震災後、3月20日にはご実家の広島県から愛車で石巻市に向かったそうです。6月には気仙沼大島へと活動の拠点を移し、11月まで地元の方とともに支援活動をされていました。

震災発生後「今ボランティアが行っても邪魔になるだけ」、「個人でできることなど、まだない」などのテレビからの情報を聞き、被災地に向かうのをためらっていたところ、外国人の友人から言われた「お前はいつもボランティアをしよう！と人に言っているのに、こんな時に自分は行かないんだな。」という言葉に、目が覚めたそうです。



ガレキアートワークショップとは、津波で流されてきたガレキを使って、自由に組み合わせることで、アート作品に変えてしまおう！という取り組み。石巻市渡波（わたのは）小学校で始められたこの作品は、今や海を渡り世界で展示される作品になっています。震災後は悲しみと絶望の象徴になったガレキも、元々はみんなの大切なもの。私たちも夢と想像力を働かせて、希望の象徴に生まれ変わらせることができたかな。

細川さんは、現在も大島に戻り、支援を続けていらっしゃるそうです。協力隊OBの行動力と判断力があれば、できる限り被災地に行って活動して欲しい。その言葉には力が感じられました。

☆☆編集後記☆☆

早いもので、帰国して1年が経とうとしています。2年間日本から離れて暮らしたことで、やっぱり日本ってすごい！と思うことも、ちょっと残念に思うこと、いろいろあります。日本で過ごしてきたみなさんも、この1年間で日本・日本人のさまざまな姿が見えたのではないのでしょうか。嬉しいことも悲しいことも、そのとき感じた感覚は時とともに少しずつ薄れていきます。3.11が私たちに残した多くの気づき、忘れずに前進する力にしたいものです。20-4 高橋梓

■発行日■平成24年3月11日(日)
■発行元■香川県青年海外協力協会
HP : <http://www.shikoku.ac.jp/~jocakgw/>
会長 高橋 和寛 たかはしかずひろ
■お問い合わせ■

E-mail : jocakgw@mail.shikoku.ac.jp